

サンパウロにおける 沖縄系移民を中心とした祖先祭祀

Ancestor Worship among Okinawan-Brazilians in Sao Paulo

小熊 誠
OGUMA Makoto

1 サンパウロとレジストロのフィナードというお盆

1) はじめに

2013年10月26日に、著者はブラジルのサンパウロに生まれて初めて降り着いた。ブラジルのお盆といわれる、フィナード（死者の日）における祖先供養を見学するためであった。翌日には、さっそく東洋人街のリベルダーデに向かい、そこにあるブラジル沖縄県人会の会館に行った。ちょうどその日は、県人会臨時総会が開かれており、多くの沖縄県人会の会員が集まっていた。何人かの方に、お話を伺った。みな年配の方で、2世が多かった。親がどのようにブラジルに移民に来たか。自分は、ブラジルでどのように生きたかなど、今まで聞いたことのない話で、それをどのようにまとめていいのか、皆目見当がつかなかった。

何が何だかわからない中で、28日は、サン・マテウス支部に行った。行ったというよりは、連れていかれた。ブラジル沖縄県人会は、多くの支部を持つ。サンパウロ市内に16支部、サンパウロ州内に24支部、サンパウロ州外に4支部、合計44支部がある。サン・マテウス支部は、サンパウロ市内にあり、その創立40周年であった。ブラジル人が集まって住んでいる中に、サン・マテウス支部の建物があり、中は講壇のある広い講堂で、多くの沖縄県人が集まっていた。創立40周年の式辞が行われ、その後に敬老会が行なわれた。大きなケーキが置かれ、老人には日本語が話せない3世4世の若い沖縄県人からプレゼントが渡された。その後に、この若い子たちによって沖縄の踊りである「かじゃでふう」や沖縄の芸能である「ウチナー芝居」が演じられた。それを見ていると、ここは沖縄でないかと錯覚してしまうほど沖縄文化に囲まれた会であった。ただ、高齢者に対しては沖縄と同じように、あるいは移民で努力してきた先輩としてそれ以上に大切にしている様子が伺えた。

リベルダーデの東洋人街を歩いていると、仏具屋を見かけた。そこに入っていくと、日本と同じ仏壇と位牌が置かれているが、よく見ると壁の一面には沖縄式の仏壇が並べられている。位牌も、日本式位牌と沖縄式位牌が上下になって大中小の大きさで並べられている（写真1）。ブラジルの日系人口が約160万人で、そのうち沖縄系は16万人をかなり越えていると言われている。人口的に



写真 1 沖縄の位牌と本土の位牌

は、10 分の 1 であるが、仏具屋の位牌や仏壇の数を見ると、ほぼ半分が沖縄の位牌であるように見える。サンパウロにおいては、沖縄系移民の勢力が強いと見える。

さらに、レジストロに行った。レジストロは、サンパウロ市内から南の海岸方面に約 180 キロ離れた都市で、1913 年から日本人の殖民によって形成された街である。10 月 31 日は、イグアッペ・レジストロ、セッテバラス日本開拓移民百周年の記念式典が行われた。レジストロと滋賀県中津川市とは姉妹都市であり、中津川市からも市長以下 24 名が参加していた。記念式典の始まりに、仏教僧によって「先亡者追悼法要」が式典会場の祭壇で行われた。その後、祝辞などの記念式典が続いたが、この「先亡者追悼法要」に興味を持った。後に記すが、11 月 2 日はブラジルのお盆と言われて墓参りが行われる。レジストロではこの日に、墓場で無縁仏法要が行われる。さらに、川に建てられている「水難犠牲者追

悼碑」の前で日蓮宗の「世界平和祈願並び先没者慰霊」が行われた。そして、先祖の名や先没者が書かれ灯籠流しが夜に行われ、多くの観光客がそれを見る。ブラジルの日系移民にとって、先没者をこれほど大切にすることがさまざまな機会に見られ、その意味がこの地域の人々の感覚とどのように結びついているのか、サンパウロでの実地調査の内容から沖縄系移民の祖先祭祀について報告したい。

2) サンパウロの沖縄系移民と墓参

(1) Y 氏夫妻の移民

サンパウロに着いた 10 月 26 日の夜、一番初めに話を聞いたのは、ブラジル沖縄文化センターに勤める、Y 氏であった。当時 60 歳代の方で、以前サンパウロにいたことがあるが、沖縄から数年前にサンパウロに移った。父は 92 歳で、首里系の趙氏だと述べた。沖縄本島の中中部である与那原で、父は山原船で儲けたと言っている。琉球時代は士族であったか、首里から離れて士族から帰農し屋取になった一族だと思われる。父は三男に生まれ、その兄は与那原でムートゥヤーであったが、今はその長男がトートーメーを見ている。父は、85 歳の時に自分の系統の系図を作成して親戚に配ったという。Y 氏はブラジルに移民に来たが、沖縄における自分の祖先について興味を強く持っている。ブラジル移民でも、年配者だけでなく、2 世以下の人々も、沖縄の自分の祖先に興味を持つ人が多くいることは、この後の調査でも分かった。

Y 氏の妻の一家は、ブラジル移民である。妻の祖父は、戦前にダバオに南洋移民に行ったが、戦死して家族ごと沖縄に戻った。妻の父は、一人息子で、1960 年にブラジルに移民に来た。妻の実家は泊の士族系で、那覇の繁多川にある。妻の父は、戦前に日本本土に出稼ぎに行ったことがある。その時、戸籍に士族と書かれていたので、本土の人からびっくりされ、差別もされなかったことを話していた。妻の父はブラジルに移民に来てしまったので、出戻りした父の姉が沖縄で祖先の位牌を守っている。妻の母は、羽地の川上出身で、妻の母の父は 1930 年前後にサンパウロから 900 キロも離れたカンボグランデに入植した。カンボグランデはサトウキビなども取れ、沖縄人の



入植が多いことで知られている。妻の母は、ブラジル生まれだったが、財を成したので、沖縄で教育を受けた。戦前に5歳の時、名護の羽地にある川上の実家に行き、成長して名護商業を卒業した。戦争で、ブラジルに戻れなくなった。戦後軍作業していて妻の父と知り合い、1960年に結婚。父母は、すぐにブラジルに来て、Y氏の妻が生まれた。しかし、Y氏の妻は長女なので、沖縄で暮らせと言われ、ブラジルから那覇の繁多川に行き、祖母と暮らして祖母の面倒を見た。妻の家は、複雑である。1930年前後に妻の母の父がブラジルに移民した。しかし、妻の母は名護で育ち、1960年に結婚してブラジルへ。妻は長女だという事で、那覇で育った。Y氏と結婚し、妻の両親や兄弟はブラジルに移民していても、夫婦で沖縄に暮らした。そして、ようやくY氏と妻は近年ブラジルに移民に来たことになる。

妻の母方祖父母の墓と位牌は、ブラジルにあった。しかし、母の兄弟である長男は、創価学会に入り、妻の祖父母のトートーメーは処分した。妻の母のトートーメーは、ブラジルで父が面倒を見ている。妻は3人姉妹の長女だが、クリスチャンになったので、父が亡くなったらトートーメーは処分しなければいけないと考えている。妻の沖縄の友人に相談し、首里の万松院で永代供養を行なえばいいと言われている。ブラジルにある母の仏壇を燃やして、その灰を万松院に埋めればいいと言われている。

ブラジルで初めて伺ったこのご夫婦の会話の中で、ブラジル移民と言っても、沖縄とのつながりがかなり強いと感じた。ブラジルと沖縄は、本当に遠い。しかし、沖縄から海外移民の例が多いこともあるが、子どもの一人を沖縄の祖父母の所に戻して沖縄で勉強させることもある。また、祖先の位牌を沖縄式にトートーメーと呼んで、それをブラジルで面倒見ることもあるし、沖縄の知り合いに戻すこともある。それは、親族との関係によって多様な位牌の面倒の見方がある。しかし、一般的に日本の移民は移民先で位牌を面倒見ることが多いように見受けられるが、沖縄の移民は位牌を沖縄に戻すこともあり、亡くなった後でもブラジルと沖縄の交流に結びつく傾向があるように思える。

(2) YS氏

翌日10月27日に、ブラジル沖縄県人会館でYS氏から、話を伺った。話のはじめは、祖先の話からであった。以後の文書は、YS氏を「自分」と表現して、会話の流れに沿ってまとめていく。

自分の父方は、祖父が名護市久志のテナヤの海岸に住んでおり、山原船を造っていた。仲本という親戚が、ブラジルから帰ってきて、祖父のコメをもってペルーに行った。そういうこともあり、祖父は1934年に南米に移民した。父は、1922年に長男として生まれ、祖父と一緒に12歳の時に南米に移民に来ている。自分は、1950年に生まれ、そのころ父は農薬を吸って倒れてしまった。おじが医者であったので、血を出して助かった。母の祖父は、佐敷の出身で、1917年に若狭丸に乗ってブラジルに移民をしている。母方の祖父は、体が弱っていた。野菜の卸をやっていて、リベルターデの市場で売っていた。そこには、沖縄の人が多くいた。

沖縄県人会は、1926年8月26日に発足している。サンパウロの市場で、立ち上がった。1978年、花城清和館長の時代に、現在地に移った。土地は1千平米あり、屋上にはミニ・サッカー場がある。戦後、第5期会長であった花城清安氏を中心に、ブラジルのあちこちを廻って県人会支部をまとめていった。したがって、現在ではブラジル沖縄県人会は44の支部がある。沖縄県人は、ユイマールという意識があって、出身市町村単位でまとまって住んでいる。サンパウロの地域によっても沖縄の出身地域の人が集まって住んでいる。たとえば、文化センターの近くにあるサントアンダルでは、糸満市出身の山城氏や大城氏や真和志出身の嶺井氏が多いし、カホーンでは那覇市小禄

出身の高良氏や与儀氏が多く、テナヤでは国頭の宮城氏が多いという具合である。(YS氏は、沖縄県人会会長を経験したこともあり、ブラジルにおけるそれぞれの地域では沖縄のどこ出身のどの姓の人が多いという事をきちんと理解している。)

1980年代から2000年にかけて、インフレが高かった。その時期に、タノモシを組織して、参加する人が多くいた。タノモシは頼母子講のことで、民間の相互扶助組織である。金銭の融通を主目的とし、主催者が仲間を集めて毎月一定限度の金銭を集め、その集めた金銭を交代で入手する。一周すると、終了する。早めに金銭を入手すると利息が多く付き、あとから入手すると利息が少なくなる。10名から12名が基本であるが、100名を超えるタノモシもあった。そして、途中で金銭をもらった人がいなくなるなど、モアイツブレもあった。以前は、自分の父もやっていて、最初に金銭を取る人は、利子なしで100パーセントの金銭を受け取るので、その人を助けるためにモアイを行うこともあった。そして、その時にはヒージャー（羊）をつぶして、汁にしてみんなで食べた。

自分の父は、ボリビアからブラジルの南マットグロッソ州に移った。自分は、13歳だった。そこで、野菜を作り、ブロッコリーや葉野菜、ナスビやブラジルの葉野菜でシュシュという野菜が毎日取れた。その後、サンパウロに来て、養豚を行なった。

自分は、サンパウロで大学に行き、エンジニアを専攻した。1981年に、琉球大学に1年間留学した。1982年半ばには、仲本工業の研修生として沖縄に滞在し、沖縄で結婚した。そして、ブラジルに戻り、エンジニアをしたり、兄弟と文房具店を行ったりした。1978年に、ブラジル沖縄県人会に青年部を作った。当時の先輩たちから、若い人と会話をしたいから青年会を作ってくれと頼まれた。1983年には、沖縄県人会で正式に青年会を青壮年会として創立した。その時、自分も県人会の理事になった。1978年から2005年までは、自分は一番若い役員だった。

自分の4世代前は、首里赤田の三男バラと言われている。曾祖父は、3名の息子がおり、祖父は長男であった。その弟である次男は、ペルーに移民に行ったが、戦前に那覇に戻った。戦争中は、壕の中にいたが、米軍につかまり、祖父の妻であるオバがスペイン語で交流したので助かった。三男は離婚したが、娘が一人いた。これらの祖先に対して、目の不自由なユタが父に言った。あなたの祖先は、アメリカ兵に囲まれていると。(1950年代のこと) 1960年ころに、長女オバ(自分の祖父の弟の妻には、姉がいて、その人のこと)が、曾祖父母とその両親、そして祖母の3男弟の遺骨を沖縄からブラジルに持ってきた。長女オバの長男と次男がブラジルにいたから。1982年に、自分の父は、明るくて高い場所に土地を買い、そこにこの祖先の墓を建てた。4代前の祖先夫婦とその長男である曾祖父母は一つの墓に入れた。祖父の3男弟とその娘の遺骨は、父の3男弟が養子的な役割を持っていたので、別に墓を作った。ウヤファールウジの家(祖先の墓)を作らないと、自分の住む家も買えないと言われた。祖先の墓を大切にしている。

父は長男であり、弟4人と姉妹3人の8人兄弟姉妹である。長男である父と3男と4男の叔父は、一緒に墓に入っている。2男の叔父は現在別の墓に入っている。祖母が生きているとき、祖母がおこって長男である父の家から次男の叔父の家で暮らすことになった。すぐに、祖母と2男叔父が亡くなり、その初七日に自分の従妹も亡くなった。葬式は、2男叔父の家から出した。位牌は、長男である父が見ることになった。そういうことで、次男叔父の墓は仮に建てられているが、将来は一緒に墓になる予定である。5男叔父は、まだ生存中である。兄弟が生きているときは別々の家に住んでいるが、亡くなった後はY家の墓一つに入ると考えられている。

ブラジルの墓は土葬で、上3段には一人一人の遺骨を置き、下には古い遺骨をまとめて置く。ただし、沖縄移民は洗骨を行なうので、その点がブラジル人と異なる。自分の祖先は、1985年と2001年に行った。基本的には亡くなって6年後に墓を開けて、アルコールをつけた布で遺骨を拭



く。親の遺骨を自分で拭くのが大切である。兄弟も妻も洗骨をする。洗骨した後、家に戻り、線香を立てて洗骨をしましたと祖先を拝む。沖縄に行ったときに、火葬を見た。以前と異なり、洗骨はなくなっている。ブラジルでも、現在火葬が増えている。

自分が琉球大学に研修していた時、自分の門中である首里赤田にあった広氏の中宗家のナカムートゥである Y 家を訪ねたことがある。広氏の家譜を見せてもらったが、自分の祖父までの系譜のつながりはわからなかった。

火の神の灰を、祖母は沖縄から南米に持ってきた。香炉に灰を入れて、南米でも火の神を拜んでいる。火の神を拜むと、身にかかる問題を乗り越えてくれる。また、財を与えてくれる。ブラジルでも、分家するとき火の神の灰を分けている。

YS 氏は、ブラジル育ちであり、琉球大学に研修をしたことがあるので、ブラジルのことも沖縄のこともよく知っている。ブラジル沖縄県人会の青壮年会を立ち上げ、若いころから県人会の役員をしていた。最終的には県人会長までなり、県人会に関することをよく知っている。県人会の歴史や県人会の人々などを話してくれたが、さらに調査は必要である。また、個人の一族の歴史も詳しい。その中で、祖先をどのように祀るかについてもよく話してくれた。長男を中心に祖先祭祀が行われることを語ってくれた。家族や一族で祖先祭祀を行なう点について、かなり強い意識を沖縄系の人には持っている事が感じられた。さらに、生きているときは分家して暮らす、亡くなった後は兄弟がそろって同一の墓を作ることは一族の集合墓であり、現在家族墓を造っている沖縄よりブラジルの移民系の人々の方が一族による祖先祭祀の考えが強いと思われる。

3) サン・マテウス支部創立 40 年・婦人会創立 35 年・敬老会

2013 年 10 月 27 日には、サンパウロ市内のサン・マテウス支部に出かけた。サンパウロの中心街から東方面の街で、住宅街にサン・マテウスのブラジル沖縄県人会支部の建物がある（写真 2）。建物の入り口は小さく、鉄のドアが閉まっている。しかし、中に入ると広い広間があり、前面には幕付きの舞台がある。そこに、サン・マテウス支部の老若男女が多く集まっていた。

創立 40 周年の会合のはじめには、まず、開拓者で亡くなった先輩たちに黙とうで祈った。ブラジルでは、日本移民が集まる記念式典や盆の日には、開拓者や無縁仏、あるいは海難者に祈りを捧げる。自分たちも移民としてブラジルに生活しており、それは先輩方の努力のたまものであるという意識を強く持っていると思われる。

その後、創立 40 周年および婦人会創立 35 周年の挨拶等、儀式が行われた。2005 年から 2011 年までブラジル沖縄県人会の会長をした与儀昭雄氏夫妻も参加していた。

次に、敬老会が行われた。80 歳以上の高齢者が 35 名いて、そのうち女性は 23 名である。その人たちに 3 世 4 世の若者が記念品を渡し、その後にケーキを切って皆に分けた。ケーキは、横 1 メートルほどもある大きなケーキで、「おめでとう」と大きく書かれ、ポルトガル語でもメッセージが書かれていた。ケーキの周りのデザインは、地元風に華やかにつくられていた。終了後は、



写真 2 サン・マテウス支部の入口



写真3 3世4世による沖縄芝居



写真4 敬老会ケーキ

「かじゃでふう」を3世4世の中学生や高校生が踊った。また、沖縄方言で話す沖縄芝居も、中学生高校生の若人が演技した。沖縄県でも、毎年9月に集落を単位に敬老会が行なわれている。その地域の役員だけでなく、若者や子どもも多く参加して賑やかに行われる。日本本土の地域では、役員が中心に敬老会が行なわれているが、それと沖縄県そしてブラジル沖縄県人の敬老会は、若者が参加する点が異なるように思える（写真3、4）。

4) ブラジル沖縄文化センター

10月28日に、YS氏とHP氏にブラジル沖縄文化センターに連れて行ってもらった（写真5）。そこは、サンパウロ州のジアダマ市にあり、リベルダーデの沖縄県人会館とはずいぶん離れた場所にある。沖縄文化センターは広い敷地で、まず中に入ると公園がある（写真6）。その公園は、細長い敷地に池があり、その中に島があるが、その島の形は沖縄本島の形である。島の各地には、沖縄県内の各市町村の名前が看板で掛けられている。ブラジルにいる沖縄出身者が、自分の故郷を思うという意図で作成された公園だと思われる。



◀写真5
ブラジル沖縄文化センター



写真6 沖縄県の形をした公園



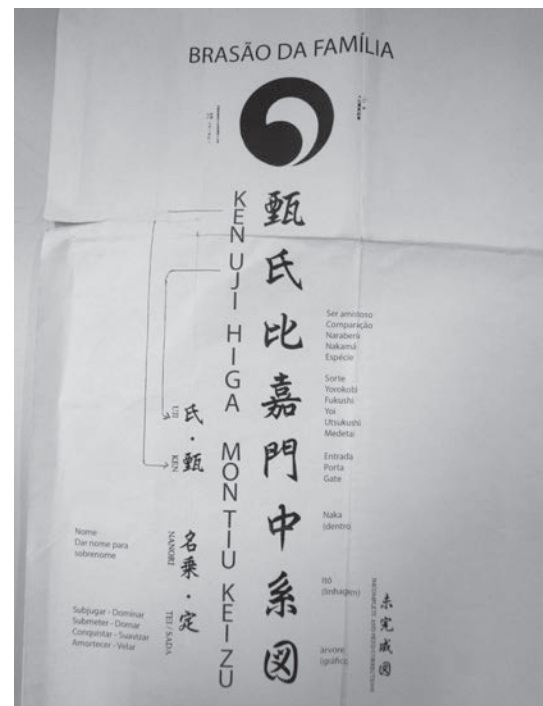
写真7 仏壇の展示



写真8 ブラジルの移民家屋



写真9 ボトルの記念碑

▶写真10
ブラジルの家系図

沖縄文化センターには、沖縄文化資料館がある。資料館の中には、ブラジル移民である沖縄人から寄贈された、沖縄におけるさまざまな資料が展示されている。資料の中で特に注意を引いたのは、仏壇の展示と系譜であった（写真7）。仏壇の展示では、中央に沖縄の位牌が置かれ、その左右に花瓶があり、その前に茶飲みに入れられた水が置かれている。そして、その前に香炉が置かれている。ここまでは、沖縄の家とほぼ同じである。さらに、移民の人々の道具も置かれる。向かって左側には、祖先の写真が置かれる。そして、左側には、コーヒーを飲んでいた遺族のコーヒーカップ、そして食事のカップとそれを食べたスプーンが置かれてあり、移民の遺族の生活が伺われる。

また、移民当時の小屋が展示されている（写真8）。屋根は草で葺かれ、壁は丸い竹が縦に立てられただけのもので、入り口にはドアもないし、窓もなかった。ほんの手作りの小屋に住んでいた。入り口を入ると、カマドがあり、ご飯を炊く鍋が掛けられている。それと、柱にランプがかけられ、家財道具は少なかった。この展示を見て、ブラジル移民の1世、2世の生活を思い出すことができる。

沖縄文化センターに、「ボトルの記念碑」が建てられている（写真9）。長さ10 cm、直径2 cm ほど

どのガラスのでできたボトルに黒い蓋がついている。このボトルに先祖を拝んでいる香炉の灰を入れ、さらにその人の名前、移民で来た船名、移民の年などをボトルに刻んでいる。これを作ろうと思ったのは、YS 氏である。ブラジルに移民して、どんな苦しい生活を続けてきても自分の先祖と子孫を思って生きた祖先たちに、彼は感謝してきた。日本人が、ブラジルに移民してきた意味がそこから生まれる。そして、世代がどんなに変わっても、先祖に感謝できる場所を作りたかった、と YS 氏は語った。このカプセルは、5000 作って、夫婦の香炉の灰を一つのボトルに入れれば、1 万人のカプセルになる。このボトルには、Kasa to Maru と刻まれてある。YS 氏の、気持ちがそこに表れている。

HP 氏の門中の家系図を、そこで見せて頂いた。それは、「甄氏比嘉門中系図」(写真 10) であり、表紙には氏・甄、名乗頭・定と書かれ、その横にポルトガル語で説明が書かれている。タイトルの上には、家紋が書かれている。この系図の初代は、「大宗新参甄得五比嘉○親雲上定宜」と書かれている。新参とは、百姓階層から琉球王府によって士族階層に認められたことで、その初代は五男として生まれ、親雲上の位を持った定宜と言う人であった。その後子孫が書かれ、明治以降は士族門中が無くなったが、門中で系統ごとに子孫が書かれていた。それをブラジル移民の門中の人調べ、ポルトガル語で解説を書いている。ブラジルの沖縄系の移民で、祖先の系図を作成している系統が多くある。この点については、後の項目で表現する。

5) サンパウロの墓地

2013 年 10 月 29 日に、知り合いの墓地を見学した。沖縄での知り合いである HM さんが、ブラジルからの移民 2 世だった。HM さんの 2 名の姉に、サンパウロで会った。姉の GA さんは 1939 年生まれで、2 番目の姉である GE さんは 1940 年生まれである。G 家の墓地は、サンパウロ市内にある Cemiterio do Redemptor という墓地にある(写真 11、12)。この姉妹の父は、1934 年に母と結婚して、ブラジルに移民した。アリアンサでコーヒー栽培をしていた。その後、ブラジル沖縄県人会の仕事で、サンパウロに 1961 年から住んでいた。

この墓地にある G 家の墓は、父が作った。G 家の墓を作るにあたって、故事がある。そこに大きな木があった。ある日雷がそこに落ちて、その木が倒れた。その場に、大きな穴が開いた。父は、そこに自分の家族の墓を作っていいか人に聞いた。大丈夫だと言うので、父はそこに G 家の墓を作った。そこは、雷に選ばれた墓であると GA さんは語った。



写真 11 G 家の墓



写真 12 日系の墓



ブラジルでは、一般的にお棺をそのまま墓に入れる土葬が一般的である。しかし、この墓は、火葬した壺を中に入れている。父は、長男である。父は、祖父母などG家の墓を守らなければいけなかった。この姉妹のオジが、沖縄からG家一族の遺骨をブラジルに持ってきた。姉妹の曾祖父母、祖父母、オバの5人の遺骨をはじめに収めた。オバは、結婚する前に沖縄の祖母の家で亡くなっている。その後、1990年にG家の姉妹の父と弟の二男が亡くなって、この墓に入った。さらに、1999年に母が、2003年に弟の三男、2004年に兄の長男がこの墓に入っている。因みに、この姉妹の兄弟姉妹は、10人である。この墓は、この姉妹の父母を中心に曾祖父母と祖父母、そしてオバ、姉妹の兄弟2名とオイの10名の遺骨が入っている。

ブラジルの墓は、この墓苑だと墓の下が深く掘られていて、4つのお棺が上下に置けるようになっていて、夫婦や家族が一緒に入れる。ただ、一般的な墓では個人的に埋葬され、数年経つと遺骨を遺骨箱に入れて、個人的にバラバラの場所に置かれる。G家の墓はブラジルの納骨方法と異なっており、父の息子である長男、二男、三男が入り、さらに未婚の姉妹もお骨として一緒に墓に入っている。G家の父は、この墓を沖縄的にしようと考えた。沖縄の墓は、兄弟であっても一緒に墓に入る一族の集合墓である。大きくなると、門中墓となる。日本本土では、兄弟でも分家すれば墓も別になる。沖縄では、前述のように兄弟で一緒に墓を使用する場合がある。この点が、日本本土と沖縄の墓の違いになる。このG家の墓は、外側はブラジル式の墓であるが、父は沖縄式の納骨方法を主張し、それを守っている。

11月2日は、フィナードス（Finados 万霊節あるいは死者の日）と言って、ブラジルのお盆に当たる。その日は、毎年お墓に祖先をお参りに行く。花と線香を持って、墓を拝む。墓によっては、ベェラ（ろうそく）を灯すが、この墓苑はプロテスタントでろうそくを灯すことは禁じられている。父の命日と母の命日には、花を持ってお参りに来る。その日は、家の仏壇には線香を灯し、お茶とコーヒー、饅頭、お餅を供える。墓参りには日本人は食べ物を持ってきて供えるが、ブラジルの人は家でパーティを開く。

シーミーの墓参りは、父も母もやらなかった。また、父と母が亡くなったときは、初七日と四十九日には、墓参りをした。

G家の仏壇は、姉妹の父が亡くなったときに、リベルタージュにある仏具店で購入した。家屋のダイニングルームに置かれており、仏壇、位牌、香炉などの置物は沖縄式である（写真13）。まず、一番上段に位牌が起かれており、真ん中に「歸真霊位」が書かれている。上下に分かれており、基本的に上段が男性、下段が女性の名前が書かれている。沖縄では霊名の習慣がなかったので、氏名が書かれている。仏壇は、向かって右から曾祖父母、父母、歸真霊位を置いて、長男夫婦、一番左の上が次男、下が三男となっている。2段目には茶碗と茶碗受け、祖先の写真も並べられている（写真14）。三段目には香炉が置かれている。この仏壇には、毎月1日と15日にお茶とコーヒーを供え、線香をたいて拝む。



写真13 G家の仏壇



写真 14 G 家の位牌と香炉など

G 家の姉妹から、以上の墓地と位牌に関する話を伺った。この姉妹は、ブラジル出身の 2 世で、沖縄にはほとんど行ったことがない。祖先祭祀に関しては、父母が行っていたようにやってきた。墓地へのお参りは、11 月 2 日のフォナードスに、花束を墓地の上に飾る。この日は、ブラジルの人々も墓地に花束を持って行き大変賑やかである。沖縄移民も、この日に墓参りをするが、シーミーの日には行わない。ただし、沖縄系の人は墓地に食べ物や飲み物をもってくる人がいて、その点はブラジルの人と習慣が異なる。

2 レジストロでの祖先祭祀

1) 日本開拓移民百周年

2013 年 10 月 31 日、我々（森武磨先生と泉水英計先生）は、日本開拓移民百周年に参加するため、サンパウロからレジストロにバスで向かった。そこでは、福澤一興さんに迎えてもらい、お世話になった。まず、レジストロ日伯文化協会の建物に行った（写真 15）。その建物は、日本の玄関と屋根の形式をしている。中に入ると、四角い縦長の長方形でできた、白、赤、黄などの紙の灯籠がたくさん置かれていた。これは、第 59 回レジストロ灯籠流しで流される灯籠である。地元の子どもたちが書いて、準備している。「北川家先祖代々之霊」と日本語で書いてあるものもあるし、「FAMILIA NAGANO」とポルトガル語で書いてあるものもある。いずれも家族の先祖の霊を祈って、川に流す。当日、この灯籠流しを見に来た人たちがこの灯籠を書くので、まだ書いていない灯籠も多くこの文化協会に準備されていた。

公園に行くと、ブラジル日本移民 100 周年記念モニュメントが新たに建てられていた（写真 16）。日本人移民が、100 年前に始まったころ、大西洋に近いこの地に日本移民が降り立ち、ここからブラジル各地に広がっていった歴史があり、地元の日系の人たちはその歴史に自分の祖先と自



写真 15 レジストロ日伯文化協会



写真 16 移民百周年記念モニュメント



写真 17 先亡者の法要



写真 18 最高齢者による 100 周年記念ケーキ

分自身を重ね合わせて特別な思いを抱いている様子がこのモニュメントから理解できる。

「イグアッペ、レジストロ、セッテ バラス日本開拓移民百周年記念式典」が、17時から開かれた。まず初めに、ブラジル国歌、君が代斉唱、そしてレジストロ市の歌が演奏された。そして、先亡者追悼法要として、舞台の上に仏陀の大きな掛け軸が掛けられ、僧侶二人が移民祖先の法要を行った。参加者は自分の席から立って舞台に行き、先亡者を祈った。ブラジルでは、移民の先亡者に対して祈るという感覚が強くあり、さまざまな場面で先亡者の法要が行われる（写真 17）。

つぎに、「入植百周年」記念祭典委員長から開会の辞が述べられ、祭典が始まった。祝辞は、レジストロ市長から始まり、次に姉妹都市の岐阜県中津川市長の挨拶があった。続いてレジストロ市会議長、サンパウロ州議会議員、サンパウロ日本国総領事、連邦議員と日系人あるいは日本人の挨拶が行われた。最後は、サンパウロ州知事の挨拶があり、全員で 11 名の挨拶が行われた。そのあと、功労者表彰、レジストロ市特別名誉市民賞及び中津川特別名誉市民賞が贈られ、閉会の辞となった。

閉会の後に、入植百年記念のケーキを前に、女性と男性のこの市の最高年齢者によってケーキカットが行われた（写真 18）。日本人のブラジル入植 100 年を祝う事と高齢者を大切にする、ブラジル日系人の観念がここに示されている。

2) レジストロの灯籠流し

2013 年 11 月 1 日、レジストロの墓地に行った。墓地には、日本人移民の無縁仏を祭る建物があった。その前に、「帰命尽十方無碍光如来」の掛け軸を立て、仏教僧が拝んでいた（写真 19）。その僧は、まだ 35 歳で、日本人の父とイタリア系の母の間に生まれ、京都の西本願寺で修業をしている。僧による読経があり、無縁になった人々の名前が読み上げられ、地元の人々による焼香が行われた。この建物の中には、無縁の人の位牌が多く収められている。この墓地には、個人の墓がたくさんあるので、日系の人も多く参拝に訪れる。本願寺の僧による読経中にも、個人的にこの建物を拝む人がいた。この墓地には、キリスト教式に大きな十字架をかけた無縁の墓もある（写真 20）。そして、各自が自分の墓に来た際に、無縁墓の前で拝む姿を見ることがある。ブラジルの人々は、無縁の死者に対する拝みの習慣があり、日系移民もその感覚を持ち、とくに移民の無縁仏を血縁はなくても自分達の祖先として拝むことが日系移民の人々の感覚として自然に行なわれる姿を見ることができた。



写真 19 無縁仏を拝む僧侶と墓参に来た人



写真 20 キリスト教の無縁墓



写真 21 生長の家による水難犠牲者慰霊祭

11月2日の午前9時から行われた、生長の家主催の水難犠牲者慰霊祭を見学しに行った。場所は、大きな川を渡る橋のたもとで、上から川がよく見える場所であった。毎年、この場で慰霊祭が行われる（写真21）。この橋の名は、リオ リベイテ デ イグアッペと呼ばれ、1962年に建てられた。水難事故の犠牲者を祭るこの慰霊祭は、この時に45回目であった。

この地域には、生長の家のほか、創価学会、大本教、日蓮宗、立正佼成会があり、1960年代から70年代、日本の経済発展期に海外布教という事でこの地でも布教が行われた。午後5時から、日蓮宗による水難事故者供養祭が行われる。これは、後述する。

レジストロの文教で、沖縄出身のTA氏にお話を伺った。TA氏は、3世である。父は2世で、母は1世。祖父は、1913年にレジストロに入植した。農業を行い、まずコメを栽培したが、その後養殖を行い、さらにコーヒー栽培、そして茶栽培を行った。父は、1919年に生まれ、1985年に亡くなっている。父の死後7年目に、洗骨を行った。母が、洗面器にアルコールを入れて、父の骨を洗った。骨は灰になり、その灰を瓶に入れて同じ墓に納骨した。この時に法事を行ったが、招待状などは出さず、知り合いが集まった。

母は、1928年生まれで、4歳の時にブラジルに移民と



写真 22 セッテ バラスの日系移民の墓



写真 23 日蓮宗による先没者慰霊



写真 24 和服を着た少女

して来た。レジストロから 100 km ほど離れた、アナジアスに住んだ。父の姉は、アナジアスに嫁に行った。また、父はアナジアスの近くのイタリリの町で商売をしており、父の姉の隣に住んでいた母とお見合いをした。二人は、沖縄の言葉で話した。母の父が、自分の父を気に入った。このような状況で、父と母は見合い結婚になった。母は、2009 年に亡くなった。

他の沖縄出身者も、死後 7 年目に洗骨を行う。ある人の洗骨では、干からびてミイラになっており、ショックだった。その人が飲んでた薬のせいではないかと言う。父の洗骨は、ショックはなかった。髪の毛があり、化繊の洋服はそのままだった。

TA 氏は、真言宗なので、その宗派の位牌を祭っている。

午後 5 時になると、日蓮宗による「世界平和記念並びに先没者慰霊」が行われた（写真 23）。この慰霊祭は、人が多く集まり盛大な慰霊祭であった。川の近くに、「水難犠牲者追悼碑」が 2 メートル以上の板碑に建てられている。その近くに、川に向かって日蓮宗の慰霊所が作られ、僧侶と尼が拝み、赤い和服に髪飾りを付けた小学校 1 年生くらいの女の子が前に 10 名ほど座っていた（写真 24）。その後ろに日蓮宗の信者が座り、慰霊を行っている。最後に、女の子から一人ずつ祭壇の前に歩み出て先没者を拝み終了する。この慰霊祭を、一般の人々が慰霊所の周りで見学し、また慰霊者と一緒に川に向かって水難犠牲者を慰霊していた。

3 ビラ・カロンにおける祖先祭祀

2016 年 11 月 1 日から 11 月 5 日まで、サンパウロのビラ・カロン（Vila Carrao）で沖縄系移民の調査を行った。この地域を紹介していただいたのは、サンパウロ大学の森幸一先生だった。この地域は、ボリビアからサンパウロに移った沖縄系の人が多く居住している。1950 年代に、ボリビア政府と琉球政府の合意に基づく移民政策によって、多くの沖縄県人がボリビアに移民した。その後、ボリビアの経済がうまくいかず、ボリビアからサンパウロに再移民し、ビラ・カロンでジーンズの縫製工場をやっている人が多い。この縫製工場は、ブラジルにおける多くのジーンズを製作しており、成功している人が多い。この地域で、ボリビアからサンパウロに再移民した沖縄系の人々を森幸一先生は調査していたので、その調査地であるビラ・カロンを紹介していただいた。それだけでなく、初日は、現地へ一緒に調査に出かけていただき、心から深く感謝する。さらに、森幸一先生の教え子で、この地域に住むサンパウロ大学大学院生の G さんを調査補助者として紹介していただいた。

11月1日の早朝にサンパウロに到着し、早速森幸一先生とGさんとビラ・カロンのゲートボール場に行った。沖縄系移民の1世のおじいさん、おばあさんがゲートボールやユンタク（おしゃべり）を楽しんでいて、数名の方からお話を伺った。その中で、INさんが自分の家の仏壇に夫の家系の家譜があるということで、早速それを持ってきてくれた。それは、護佐丸を始祖とする毛氏の11世盛全（雍正四＝1726年から乾隆四十三＝1778年）が分家してできた小宗久高家門中の家譜であった。毛氏で名乗頭盛の小宗久高家で、始祖は11世の盛全であり、この系統は久高系統の南風原則と呼ばれている。この系譜をもとに、護佐丸から系譜にそって世代を下り、さらに小宗久高家の系譜を下ってINさんの夫までの系譜を明らかにすることができ、そのメモをINさんに渡すと大変喜んでいただいた。

INさんは、1948年生まれで、15歳の1963年にボリビアに移民し、第2の移民居住地に居住した。長女だったので、17歳で結婚した。その後、実家の家族はみな沖縄に帰国したが、INさんは結婚して子供もいたので帰国せず、サンパウロに再移住した。夫は、長男であるが、仏壇に収められている夫の祖父や父に興味はないが、INさんは、毎月1日と15日には仏壇に線香をあげる。

11月2日は、Gさん一家の墓参りにお邪魔した（写真25）。Gさんの父親は、7人兄弟で姉2人と兄4人の末っ子である5男になっている。Gさんの祖父母は、1959年に沖縄県からボリビアに移民し、Gさんの父親は1960年にボリビアで生まれている。G家の墓は、Gさん父親の両親と長兄、長兄の長男（夭折）が入っている。Gさんの祖父母は数年前に亡くなったばかりである。ブラジルの沖縄系の人々は、死後7年目に洗骨をする。

この地域では、墓参りは1年のうちで数回行われる。まず、正月十六日、春秋の彼岸、清明は仏壇のみ、お盆はタナバタの日に墓参りが行われる。本来、沖縄では旧暦7月13日から15日が盆で、7月7日の七夕は墓掃除の日になっている。この地域では、タナバタの日に墓掃除を兼ねて墓参りをしている。そして、11月2日のFinados（死者の日）には、ブラジル人とともに「ブラジルのお盆」という雰囲気ですら墓に参る。そのほか、祖先の命日にも墓参りに行く。

G家の沖縄の墓は、知念村のハンタビチ門中墓で、Gさんの曾祖父母もこの門中墓に入っていた。1979年に、祖父が沖縄に戻り、門中墓に入っていた曾祖父の骨をサンパウロに持って帰り、G家の墓に埋めた。骨を持って帰ったといっても、骨の代わりに石を三つ持ってきた。石は、沖縄のユタによって拝まれた。Gさんの父は5男だが、次男の叔父は6歳の時1953年に亡くなっており、この骨としての石ももってきている。その年のタナバタに納骨された。現在G家のこの墓には、祖父母と長男伯父の三男も入れられている。2016年3月に、父の3回忌、長男伯父の13回



写真 25 G家の墓参り



写真 26 G家の沖縄式仏壇と沖縄式供物



忌、長男伯父の三男の33回忌をまとめて行った。この地域では、ほぼ日本と同じように、3回忌、7回忌、13回忌、25回忌、33回忌が行われる。

Gさんの父親と父親の姉二人と墓参りした後、父の長兄の家にある祖父母の仏壇を拝みに行った。仏壇と位牌は、沖縄式のもので、供物も沖縄式の供物を長兄の妻が手作りで備えていた(写真26)。手前の皿には、豚の煮た三枚肉、揚げた豆腐、昆布が盛られ、もう一皿は揚げ物、三皿目には餅が入っていて、その三皿が二組仏壇に供えられていた。リビングでは、G家の親戚が多く集まり、仏壇で供えた料理と同じ料理を食べながら、話がはずんでいた。この光景は、まさに沖縄式のにぎやかなお盆と同じであり、それがブラジルで行われていた。

11月3日は、サンパウロの沖縄県人会に行き、その後ビラ・カロンに行った。そこで、IA氏にライフヒストリーのインタビューを行った。彼は、男性5名、女性2名の7人兄弟であり、その長男である。1951年生まれで、8歳の時、1959年にボリビアの第2移民地域に移住した。8歳から畑で親の手伝いをして、日本語もすぐに忘れてしまった。彼は、1969年にブラジルに来て、父は1971年にブラジルに来たが、すぐに亡くなった。当時は永住権もなく、ミシンの台数も少なかったが、衣料の製造販売を行った。

IA氏の母は、トートーメーに対して過剰に敏感に考えている。家族に何か不幸が起きると、トートーメーをちゃんと面倒を見ているかと考えてしまう。ウヤファーウジ(祖先)が、我々に罰を与えることはない。そして、ブラジルに子孫がいて、グワンス(祖先)とともにうまくいくと母は考えている。IA氏は、自分は準2世だと考えている。祖先に対する祭祀などは、母の見よう見まねで、2世3世になるとトートーメーの面倒は見きれなくなる。カトリックは、仏壇の崇拝は可能だが、プロテスタントはトートーメーを捨ててしまう。2世3世はキリスト教に改宗している人もいるが、1世の年寄りにはトートーメーにこだわる。沖縄の墓に入っている祖先をブラジルに持ってくる場合は、骨の代わりに石などでウンチケー(お連れ)する。トートーメーを持っていると、(それによってさまざまなことをさせられるので)トートーメーの奴隷になると感じている人もいる。

新しい家を買ったとき、まず屋敷ウガン(拝み)を行った。まず、ブラジルにいるユタを呼んで、事前に花を置き、ローソクをたいて屋敷にお拝で準備する。吉日に屋敷ウガンをする。元々そこに住んでいた人の名前を挙げ、その魂がさまよっていること、いろいろ問題があったことなどをブラジルの言葉でユタが語る。その人たちの邪魔が入るから、その人たちの落ち着く場所を探す。前もって用意してあったバラ1本とろうそく1本に火をつけて、その花の前にいた人の名前を付けていった。3名の前に住んでいた魂があった。近くの墓地に行き、そこに名前を付けたバラを持っていき、その魂を天の太陽に拝んだ。

IA氏が新しい家を買ったときには、このようにユタに依頼して屋敷の拝みを行ったが、2世3世など若い人でもユタの世話になる人がいる。不幸があると、何か足りないものがあって、不安になるのではないかと。だから、ユタに会いに行く。ブラジルのユタは、ポルトガル語でも祈ることができる。

お盆は、今は新暦の7月15日にやっている。しかし、数年前までは母が沖縄暦を沖縄から送ってもらって、それを見て旧暦で行っていた。今は、旧暦でやる人と新暦でやる人が、半々である。

IA氏は、長男なのでトートーメーを持っているが、それを深く信じているわけではない。トートーメーは捨てなければいいのではないかと。位牌に線香をあげれば、それでいいのではないかと。中味はどうでも、祖先に対する尊敬の気持ちがあればいいのではないかと述べた。

また、ビラ・カロンの2世の多くが、横浜に出稼ぎに行っている。そのため、ビラ・カロンの沖縄県人会支部と鶴見沖縄県人会とが最近交流協定を結んだ。今後、横浜鶴見でも移民交流の調査を

する必要があると思われる。

11月4日は、Gさんの友人であるIFさんが、家で持っている沖縄の家譜を見てほしいということで、お二人とサンパウロの滞在ホテルで会った。IFさんが持ってきた家譜は、やはり護佐丸系の毛氏小宗の家譜であった（写真27）。11世盛全から分かれる久高門中の家譜だが、12世の3男盛短から分かれた「中城側」という支系の家譜である。16世に7男として盛緒という人物がおり、明治26年生まれでこの家譜に記録されている。その盛緒が大正7年にブラジルに移民した。その曾孫、つまり3世代下の19世がIF氏になる。彼は、ブラジル移民4世である。全く日本語が分からない。そこで、私に家譜を見せて系譜を説明してもらいたかったのである。彼は、始祖の護佐丸から自分まで19世代離れているが、自分に琉球の偉大な祖先がいるということでたいそう感心していた。沖縄系ブラジル移民の若い者も、家譜などを通じて沖縄の祖先に対して感心を持っている



写真 27 小宗毛氏系図家譜

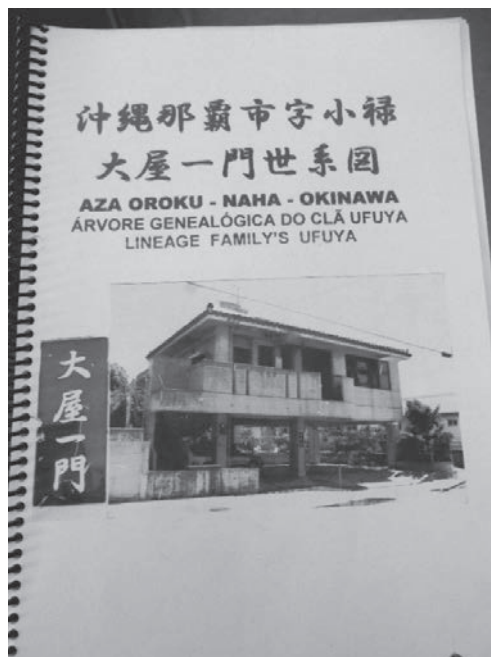


写真 28 大屋一門世系図

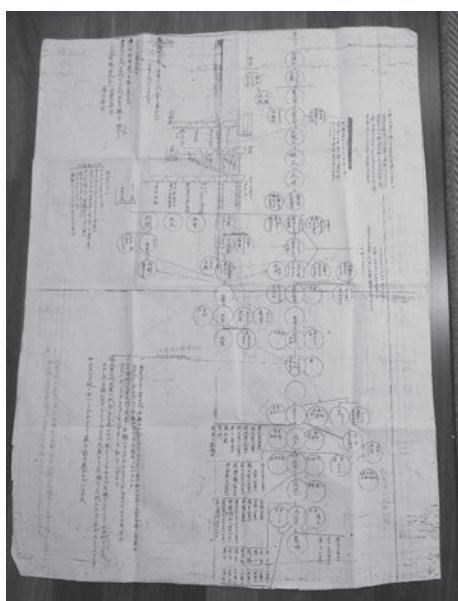


写真 29 THO 氏作成の大屋門中の系図



写真 30 森幸一先生とTH氏の系譜調査



ことがわかった。

11月5日は、沖縄県那覇にある小禄地域の門中を研究しているTHさんに会った。THさんは、まだ30歳代で若いですが、ポルトガル語も含まれている「沖縄那覇市字小禄 大屋一門世系図」を作成して持っている（写真28）。そこには、大屋一門の移民の氏名や屋号、生年月日などの一覧表も作られている。さらに、サンタマリアに住んでいた大屋一門のTHOさん（死去している）が、手書きで大きな1枚の紙に書いている大屋一門の祖先からの系譜図も所有している。

大屋一門は、百姓系門中なので、琉球王府時代の家譜はない。THOさんが生前に沖縄に行って、系譜専門家を訪ねて大屋一門の系譜を調べたものである。したがって、祖先は家譜に書かれた名前があるわけではなく、「大里大主」など、不明瞭な祖先から系図は始まっている。

T家は、大里（ウフザト）門中である。大里門中は、大屋門中と祖先が共通すると思われる。大里門中のムートゥヤーは、那覇の垣花にある。大里門中は、47家族ある。サンパウロでは、サンタマリア地区に多くの大里門中が住んでいる。毎年、ユタに行く時期を訪ね、大里門中の誰かが沖縄の門中墓を訪ねる。今では、2世3世が沖縄に行き、日本語はあまり話せないが、沖縄の門中の人と会う。その時に、ブラジルの門中からウサカティ（御酒手と書き、祖先祭祀の分担金を意味する）を集めて、小禄の本家に持って行く。

TH氏の祖父は、次男兄と三男兄と一緒に門中墓を作成している。TH氏の祖父母は、サンパウロで洗骨したのを覚えている。自分は、現在カトリックだが、死んだときは仏教になると思っている。なぜなら、葬式ではパードレ（神父）を呼ばないで、仏教のお坊さんと呼ぶことになるからだ。

大里門中の親睦会があり、サンタマリア会館で毎年8月に行われる。その時に、大屋門中も参加する。

TH氏は、三男である。父は三男であり、その兄である次男伯父の家にTH氏は住んでいる。養子になるかどうかはわからないが、今は次男伯父と住んでいる。

TH氏から、小禄出身の大里門中及び大屋門中の話が聞けた。小禄出身者は、サンタマリアに多く住んでおり、大里門中及び大屋門中の人も多くここに住んでいる。この門中は、いわゆる百姓系門中であるが、THO氏が作成した大屋一門世系図では、伝承による祖先が、近代初期あるいは近世の祖先から書かれている（写真29）。さらに、その原盤になる手書きの系図は重要で、今後分析の価値がある。

2016年の調査は、サンパウロ大学の森幸一先生にアドバイスしてもらいながら、ビラ・カロン在住の沖縄系移民を中心にインタビュー調査をさせていただいた（写真30）。系譜の調査をすると、かなり家譜や家系図を持っているブラジル移民の人がいた。祖先を通して自分がいるという感覚が、移民の人々には強い。家系を通じてブラジル移民と沖縄の結びつきが強いことが分かった。2世・3世以下の人も、日本というよりは沖縄との結びつきやアイデンティティを強く持っており、そのネットワークはブラジルと沖縄、さらに日本（特に横浜）と3か所にわたっていることがわかった。今後の調査の志向は、この3か所を通したネットワークを念頭に進めることが必要だと思われる。

【付記】 森幸一先生とは、神奈川大学日本常民文化研究所で何度もお会いし、サンパウロでの調査でも大変お世話になった。一緒に調査させていただき、格別にお世話になった。しかし、森先生に本報告書を見ていただく前の2019年10月21日に急逝された。今後も、お世話になりながら一緒にブラジルにおける沖縄系移民の調査を続けようと思っていたところであったが、とても残念で

ある。森幸一先生のご冥福を深く祈ると同時に、お礼の意味を込めてサンパウロでの調査の写真を掲載させていただいた。